
ポケットモンスター ジョウトに転生!?

ナンテコッタイ!!! <(^o^)>

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスター ジョウトに転生！？

【Nコード】

N2786Z

【作者名】

ナンテコツタイ!!!<(^o^)>

【あらすじ】

神のミスで死んでしまったポケモン好きの高校生タクヤは、ジョウトに転生することになった。使用するポケモンは生前ゲームで使っていたポケモンで、家にはポケモンの転送装置まである。タクヤはジムを回ってリーグに出場しようしようと考えてる。

Prologue 転生前

「ん？ここはどこだ……？」

俺はタクヤ。ポケモンが好きな高校生だ。今俺は、真っ白な空間にいる。

タ「はあ、何にもねえな……。つて、誰アンタ！？」

そりゃ驚くよ、いきなり空から人が降ってきたんだから。

「私は神だ」

タ「ダメだ、ただの痛い人だ」

痛神「誰が痛い人だ！！つて、のところまで痛神ってされてるし！！だから、私は神だつて言っているだろうが」

タ「で、神（笑）が一体何のようですか？」

神「お前今、神の後に（笑）付けただろ。まあいい。お前には転生してもらおう」

俺は耳を疑った。は？俺死んだの？

神「そう。お前は私のミスで死んだのだ」フンス

タ「ちつたア悪びれるよ……」

神「だからせめてもの詫びとして、ポケモンの世界に転生してもらうことになった」

タ「あ、ああ。で、向こうに付いた時の手持ちは？地方は？」

神「お前、生前にポケモンしてただろ。手持ちとかのポケモンは生前にゲームで使っていたポケモンを使ってもらう。ボックスの代わりとして、転生後のお前の家になるところにでも転送装置を置いて

おこう。あと、ジヨウト地方だ」
タ「ありがとうございます」

実際に会えるのか、俺のポケモンたちに……

神「さて、ここでひとつだけ願いを叶えてやろう。何がいい？」
タ「うーん……俺が願えばそのポケモンは個体値が6Vになるとか？」

神「いいだろう。では、良い転生ライフを。お前のバツクの中に細かいことを書いた紙を入れておく」

タ「はい、ありがとうございます。って、うお!?!」

床に穴があいた。うわあ~~~~落ちる~~~~!!!!

タ「どうしてこうなった~~~~~~~~!?!」

Episode 1 目覚めると29番道路

タ「ん、んん？」

俺は目を覚ました。あのクソ神後で殺しちやる。で、ここはどこだ……？

タ「とりあえずバッグとかの確認をするか。っと、手持ちはっと」

腰にはボールホルスターがついていて、6個のモンスターボールがあった。

タ「えっと、こいつが色違いのテッカニンで、こいつがガブリアスか。これはハッサムで、これがゲンガーで、これはカイリキーで、最後にマルマインか……」

これはすべて俺が生前使っていたポケモンだ。特にお気に入りなテッカニン。ポケットに入れて色違いの陽気なツチニンを育てた。

タ「次はっと、これはポケギアで、こっちがトレーナーカードか……。どれどれ」

ポケギアのマップを確認すると、ここは29番道路というのが分かった。トレーナーカードを見ると、名前はタクヤで、6年前にトレーナーになったことになっている。しかしバッグは一個もなし。誰かと旅したいから言い訳を考えとかないといけない。

タ「で、これが図鑑で、バッグはこれか」

まず、図鑑の動作確認としてテッカニンを調べてみた。

テッカニン 忍ポケモン。ツチニンの進化系。鳴き声を聴き続けると、頭痛が収まらなくなる。見えないほどの速さで動く。

と、説明が流れた。

使える技は、虫食い、ひっかく、固くなる、吸血、すなかけ、乱れひっつき、心の眼、影分身、連続切り、嫌な音、剣の舞、切り裂く、高速移動、バトンタッチ、シザークロス

ちよいちよい、いつまで続くんだよ、オイ。

エアカッター、スピードスター、さわぐ、糸を吐く。

結局、テッカニンが覚える技の全てを覚えていた。

タ「オイオイ、覚えられる技が4つより多くても大丈夫だとしても、覚えられる技全部覚えているとは……」

次にバッグを探ると、いろいろな回復道具やドーピング用品の他に紙が一枚入っていた。

タ「なんだこの紙？何か書いてあるな、なにになに？」

タクヤへ

お前の家はポケギアのマップで確認しておけ。

今の手持ちはそれだが、そのほかのポケモンはお前の家で放し飼

いにされている。

お前の家になるところには、一人使用人を置いておいた。お前のいない間の家とポケモンの管理はその人に任せておけ。

では、良いトレーナーライフを。

神より

タ「神からの手紙か……。ま、とりあえずマップ確認しながら家に行くか」

とりあえずワカバタウンを目指すタクヤであった……

To Be Continued...

Episode 2 ワカバタウンと俺のポケモンたち

タ「っと、俺の家になるのはここか……」

どーも、タクヤです。つい先ほど転生してきた者です。

俺は今、ポケギアを確認しながら自宅に向かっているところです。
今、自宅を見つけました。

タ「まあ、入ってみるか……」

とりあえず門を開け、入ってみた。

？「おかえりなさいませ、タクヤ様」

タ「うおっ!!」

玄関のドアを開けると、そこにはメイドが迎えていた。そのメイドは、金髪ロングな髪型で、スタイルもかなりいい。かなり美人だ。

タ「ああ、アンタが例の神様が用意した使用人？」

メ「はい。神様から手紙を預かっています。こちらを」

タ「おお、サンキュー」

メイドからもらった、神様からの手紙を読んでみた。そこにはこんな内容が書かれていた。

タクヤへ

自宅についたらメイドが迎えていただろう？その娘がお前のメイドだ。

家の管理、お前の身の回りの世話は基本その娘がする。お前が

いない間のポケモンの世話や、ポケモンの転送などもしてくれるぞ。では本題だ。その娘には基本何してもいいぞ。むしろ何もしない方が損というものだろう。抱いても咎めないし、ほかの娘に変えて欲しいのなら変えてやる。さしずめ性欲 理役として使ってもいいということだ。

では良い性 生活をな……
神より

タ「ブツ！……！」

俺は吹き出してしまった。

メ「どうされました？」

タ「あ、アンタはこの手紙の内容知ってるのか？」

メ「ああ、 欲処理のことですか？」

タ「ブツ！……！そ、そうだよ。アンタはこれでいいのか？」

メ「タクヤ様のご命令とあらば」

タ「そ、そうか……」

メ「もしかして、今から抱きたいと仰りますか？」

タ「ち、違う違う！ちょっと確認しただけだ」

メ「そうですか。では、家の中を案内しましょう」

そう言われて、いろいろな部屋を見ていった。広すぎると思えるほどのリビングや、普通の家のリビングほどの広さもある俺の部屋。使用人の部屋などを見て回った。そして……

メ「こちらから、ポケモンが放し飼いにされている庭に出ることができます。セキュリティは万全で、おそらくロケット団如きが入ることはできないでしょう……」

タ「そうか……。おっ、アイツはカイリユーカーか。こっちはジュカ

インもいるな……。湖の方にはギャラドスやスターミーもいるな……。また手持ち変更の時は頼むわ」

メ「その説明ですが、まずは家の中に入りましょう」

俺たちは家の中に入り、リビングに来た。

メ「このパソコンが、転送装置です」

タ「へえ……」

そこにはさほど大きくはないが、そこまで小さいわけでもないデスクトップパソコンと、その横にUSBケーブルでつながれた、半球状のくぼみの付いた小さな機械があった。

メイドは半球状のくぼみの付いた機械を手にして言う。

メ「まず、放し飼いにされているポケモンをボールに戻し、この機械にセットします」

そう言うと、次に小さめのノートパソコンと、同じ半球状のくぼみの付いた小さな機械を取り出した。

メ「次に、同じくそちらでもボールをセットして、最後にパソコンでこのように操作すると転送されるのです」

タ「ちよつと待て、パソコンのバッテリーは？」

メ「それは神様の力を使って、永久電池にしてあるので大丈夫です。では、こちらのパソコンと転送装置を渡しておきます」

タ「それはそれでどうかと思うんだが……。ま、いいか。俺はとりあえず疲れたから寝るわ」

メ「私と一緒に？」

タ「『疲れたから』と言ったのが聞こえなかったか？お前と一緒に寝たら理性が持ちそうにないんだが……」

メ「冗談です。いつごろ起こせばいいでしょうか？」

このメイド、意外と茶目っ気があるようだ。それにしてもいつごろ起こしてもらおうかな……

タ「じゃあ、飯ができたらでいいよ。旅立つのは明日にする。ウツギ博士の研究所にも行きたいしな」

メ「了解しました。ではおやすみなさい」

タ「おう、おやすみ」

とりあえず俺は、自室に来た。

ベッドに寝転がり、さっきまでのことを振り返る。

タ「ふう、何かいろいろありすぎだな。美人のメイドさんといい、性欲処 役といい、精神的に疲れたよ……。ま、明日は旅立ちか……」

俺は目を閉じる。するとすぐに意識は眠りに落ちていった。

T o B e C o n t i n u e d . . .

Episode 3 ウツギ研究所と新人トレーナー

タ「はあ。昨日はいろいろありすぎて疲れた……」

ども、タクヤつす。昨日は散々でした。メイドに起こされて飯を食いに行ったら、メイドに「あーん」されそうになったし、風呂には突入してくるし……

タ「ま、今日から旅立ちだしな！強気で行くぜ」

そう。今日は旅立ちなのだ。

タ「そういえばジョウトではポケモンを一匹出しておくのが流行っているんだっけ？よし、出てこいハッサム」

ハ「ハッサム！……！」

タ「ハッサム、今日は旅立ちだから強気で行くぞ。今日からよろしくな」

ハ「サム、ハッサム！……！」

メ「おや？タクヤ様、もう行かれますか？」

タ「ああ。家のことは頼んだぞ？行くぞハッサム！」

ハ「ハッサム！……！」

メ「行ってらっしゃいませ、タクヤ様、ハッサム」

いよいよ旅立ちだ。新人トレーナーがいたら一緒に旅しようかな。いつそ鍛えてやろうか……

そんなことを考えているうちに、ウツギ研究所についた。そういうウツギ博士って研究中は周りのことが見えなくなるんじゃないかな。たっけ。

タ「ごめんくださいーい！」

ハ「ハッサム、ハッサム！」

「はい？どちら様？」

タ「どうも、トレーナーのタクヤです。こっちはハッサム」

ハ「ハッサム！」

タ「こちらの研究者さんですか？」

研「そうだよ。博士に用事？」

タ「まあ、トレーナーとして会って会っておきたいので」

研「そうか。じゃあ入って」

タ「失礼します」

研究所に入った俺たち。そこには新人用のポケモンである、チコリータ、ワニノコ、ヒノアラシと、それを見ているウツギ博士がいた。

タ「ウツギ博士」

ウ「ん？誰だい君は？」

タ「トレーナーのタクヤです。昨日ワカバタウンに引っ越してきたんです」

そう。俺の出身は一応カントーのタمامシシティになっている。

昨日引っ越してきたことになっているのだ。

ウ「そうか、君が引っ越してきたのか……。そのハッサムは君のかい？」

タ「そうです。ほらハッサム、挨拶しろ」

ハ「サムサム、ハッサム！」

ウ「ははは、元気がいいね。で今日はどっいった用事かい？」

タ「まあ、引越しの挨拶と、トレーナーとしてウツギ博士に会っておきたかったです。まあ、今日旅立ちの新人はいないかな？」

か考えてたりしますけど」

ウ「新人かい？それなら二人居るよ。一人はブリーダーを目指してるとか」

タ「マジすか？名前はなんですか？」

ウ「確か、コトネちゃんとカズナリ君だったかな」

マジか？あのシンオウに来てサトシたちと会ったアイツらか。

タ「俺も会ってみたいです。いいスか？」

ウ「もちろんだよ。先輩として色々と教えてあげて欲しいし。そういえば君はジムを回ってるのかい？」

タ「俺は元々研究職に就きたかったからトレーナーになっただけですからジムは回ってないんです。でも最近実力を試したくなっただけ」

ウ「そうか。応援してるよ」

タ「はい。ありがとうございます」

そんな話をしてる間にハッサムはチコリータたちと遊んでいた。

ハ「サム、ハッサムハッサム、サム」

チ「チコ！」

ワ「ワニワニワニ！」

ヒ「ヒノー！」

ハ「サム」

仲良くなってるし……

ウ「図鑑は持っているかい？」

タ「自作のならこれを」

図鑑は自作ということにしてある。

ウ「自作！？君はすごいね!!！」
タ「いえいえ」

そんなことをしていると、新人トレーナーが来たようだ。

コ「こんにちは〜！」

マ「リルル〜」

カ「待つてよコトネ〜」

コ「カズナリ遅い！」

ウ「こんにちは、コトネちゃん、カズナリ君」

タ「こんにちは」

コ「こんにちは〜。この人は？」

タ「ああ、俺はタクヤ。昨日引っ越してきたトレーナーだよ」

カ「はあはあ。こんにちは、ウツギ博士。こちらの人は？」

ウ「昨日引っ越してきたタクヤ君だよ」

タ「で、そのチコリータたちと遊んでいるのが俺のポケモンのハツサムだ。ほらハツサム、挨拶だ」

ハ「ハツサム！サムサム、ハツサムー！」

コ「私はコトネで、こっちがマリル。よろしくって事ね、ハツサム
マ「リルル〜」

カ「僕はカズナリです。よろしくお願いします」

はあ、アニメに出てきたコトネとカズナリそのものだ。

ウ「じゃあ、新人トレーナー用のポケモンをあげるから、この三匹から選んでね」

タ「みんな頼りになるぞ」

コ「うーん、どの子にしようかな……」

カ「そうですね〜……」

かれこれ10分。悩んだ末に……

コ「じゃあ、私はチコリータにします。チコリータ、よろしくって事ね」

カ「じゃあ、僕はワニノコにします」

チ「チッコー!!!」

ワ「ワニワニ!!!」

ヒ「ヒノ〜……」

ハ「ハツサム、サム」

選ばれたチコリータとワニノコはとても喜んでいて、選ばれなくて落ち込んだヒノアラシをハツサムが慰めていた。

タ「そうだ。君たちの旅に俺もついてっていいか？」

カ「タクヤさんが？」

コ「勿論、いいて事ね」

チ「チッコー!!!」

ワ「ワニー!!!」

ハ「サムサムー!!!」

タ「サンキュー。ハツサムもこいつらと仲がいいみたいだし、喜んでるよ」

ということ、俺たちは旅立つ

ウ「ちょっと待ってくれるかい？」

タ「何ですか？ウツギ博士」

ウ「タクヤ君にヒノアラシを貰って欲しいんだ」

タ「いいんですか？」

ウ「君のハッサムと仲良くなったみたいだし、引き離すのもかわいそうだからね。君だったら悪いようにはしないだろうし」
タ「ありがとうございます」

俺はバッグからパソコンと転送装置を出した。

ウ「何だいそれは？」

タ「自作の転送システムで家と繋げるんです」

ウ「それも自作？すごいね君は」

コ「ほんとにすごいって事ね」

タ「もしもし？」

メ「タクヤ様、どうされました？」

タ「早速手持ちの入れ替えだ。俺はそっちにカイリキーとマルマインを送る。そっちはバクフーンを送ってくれ」

メ「わかりました」

手持ちの入れ替えが終わった。

タ「よし改めて、ヒノアラシゲットだ！」

ハ「ハッサム！」

タ「よし、出てこいバクフーン！」

バ「バクッ！」

カ「うわー、バクフーンだ！」

タ「バクフーン、ヒノアラシの世話を頼む。ハッサムも協力してくれ」

バ「バク！」

ハ「ハッサム！」

バクフーンは背中にヒノアラシを乗せた。

カ「こう見ると親子みたいですね」

バ「バクバク！」

ヒ「ヒノー」

タ「もう仲良くなったみたいだな。じゃあ行くぞ、コトネ、カズナ
リ」

コ「うん！」

カ「はい！」

ハ「ハツサム！」

ウ「じゃあ気を付けてねー」

俺たちは研究所を後にした。

To Be Continued . . .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2786z/>

ポケットモンスター ジョウトに転生!?

2011年12月10日14時52分発行